

黒豹注意報 6

～純情OLタンポポの決意～

Y u k a & K a z u m a

京みやこ

Miyako Kyo

termity



エタニティ文庫

もくじ

黒豹注意報 6	5
番外編 道しるべは、花のような君	283
書き下ろし番外編 持ちつ持たれつ	317

黑豹注意報 6

前巻のおさらい

新入社員が配属されて二ヶ月ほど経った最近では、職場の空気もすっかり落ち着いていた。社会人二年目の私、小向日葵ユウカが所属する総務部内も穏やかだ。

今日も私はいつも通りパソコンに向かって、社内報用の原稿を書いている。半分ほど仕上げたところで手を止め、大きく背伸びをした。その時、デスク上にある小さなカレンダーが目に入る。

「和馬さんと付き合い始めて、あつという間に四ヶ月が経ったなあ」

竹若和馬さんは、この会社の社長付き秘書兼SPをしている。そんな彼と知り合ったのは、社内報に掲載せる社長インタビューのために社長室を訪れた時だった。それから本当にいろいろあったのだけど、特に、この一ヶ月間は非常に濃い毎日を送っていたと思う。私はカレンダーを眺めながら、これまでのことを振り返る。

五月初めの連休は、朝から晩まで和馬さんと一緒にいた。……というか、自分のアパートに帰してもらえなかった。

容姿端麗で社内で大勢のファンがいる和馬さんだけど、いつも私に優しく、惜しみなく愛情を注いでくれる。だから、なにも心配することはないのだ。

とはいえ、和馬さんに言い寄る女性を見ると、どうしたって不安になってしまう。

——でも、そのことを留美先輩に相談したのは失敗だったな……

私は小さくため息を吐いた。

和馬さんとも仲よしで、私のことを可愛がってくれている中村留美先輩に不安を打ち明けたところ、『結婚しちやえば、誰も間に割り入らないから安心でしょ』という言葉が返ってきたのだ。

そんなアドバイスに賛同はできないけれど、和馬さんとの結婚が嫌ということではない。自分の気持ちだが、そこまで追いついていないだけ。

『いずれ私と同じ苗字になるユウカのために用意しました。一日でも早く、あなたがこのハンコを使う日が来るといいのですが』

そのセリフと共に和馬さんから『竹若』と彫られた立派なハンコをもらった時だって、実は嬉しかった。だいたい驚いたけれど。

他にも和馬さんとの会話を重ねるうちに、私は結婚を意識するようになった。だからこそ、彼にふさわしい大人の女性を目指したのである。

今みたいになっちゃうとこのことで大騒ぎしたりせず、余裕のある態度で振る舞うことがで

きたら、和馬さんの隣に立つにふさわしい女性になれるのではないか。

その時の私は、本気でそう考えていた。……残念ながら、計画第一弾は失敗に終わっただけだ。

次に、やたらと嫉妬しととしないことを心がけようと決めた。ちょうどその頃、『細かいことまで干渉かんしょうする女は鬱陶うつとうしいと彼氏に言われた』という話を知人たちから聞いたのだ。確かに、そうだと思う。ドラマでも漫画でも、行き過ぎた嫉妬は別れの原因の一つである。

だけど、決心とは裏腹に、私は生まれて初めて本気で嫉妬心しととしんというものを抱いた。

それは、和馬さんが海外から来た大事な取り引き相手の女性をエスコートしていた様子を目にした時のこと。

彼が笑顔でその女性に話しかけているのを見て、とにかく羨ましくて仕方がなかった。たとえ彼が仕事でその女性と接しているのだとしても、自分の感情を抑えきれなかった。

その頃の和馬さんはものすごく忙しくて、私と顔を合わせるどころか、電話で話すことさえもできなかったから。

私は自分の中に生まれた黒い感情に戸惑った。嫉妬しととという醜みにくい感情を和馬さんに知られたくなくて、必死に彼と距離を取ろうとした。

それなのに、和馬さんはそんな私を丸ごと包み込んで、手加減なしの愛情を示してく

れて。

こんな風に、優しくて懐なつかしい和馬さんにはやられっぱなしなのだ。もちろん、いい意味で。

それは嬉しい反面、悔くしいとも思う。私だって、和馬さんに『参りました』と言わせたい。

そしてあれやこれやと考えた結果、ある計画を思い付いた。和馬さんを驚かせることができる、とびきりのサプライズを。

これについては試行錯誤しこうそくごの途中だから、絶対に彼には内緒。バレないように、細心の注意を払わなくては。

私はカレンダーを見つめながら、拳こぶしを握った。

その時、通りかかった留美先輩に声を掛けられた。

「タンポポちゃん、カレンダーを覗のぞみつけて、どうしたの？」

この『タンポポちゃん』というのは、先輩がつけてくれた私のあだ名だ。今では、社内の人からの人からそう呼ばれている。

「あっ、あの、いえ……、な、なんでもないですよ！ はは、はははっ」

「そうなの？ 体調でも悪いかと思ったんだけど、本当に大丈夫？」

先輩は私のおでこに手を伸ばしてくる。

が、ほっそりした手が触れる前に、横から伸びてきた逞しい腕が私を捕らえた。キヤスター付きの椅子ごと私を引き寄せ、その腕の中にすっぽりと抱え込んだ和馬さんが留美先輩に言い放つ。

「中村君、私に断りなくユウカに触らないでいただけますか」
そんな彼の様子に、留美先輩は盛大に呆れかえる。

「私にまで嫉妬するような心の狭い男は、タンポポちゃんに嫌われるわよ」
苦々しい面持ちで睨み付ける先輩を見て、彼はクスツと小さく笑った。

「心配無用です、嫉妬は愛情の証ですから。ねえ、ユウカ」
和馬さんは前屈みになり、私の右頬にチュツと音を立ててキスをしてくる。

「ひいひいっ!!」

驚いた私は奇声を発し、大きく仰け反った。反動でキヤスターがグリンと回転し、椅子から滑り落ちそうになる。

彼がすかさず抱き寄せてくれたので落下は免れたが、心臓が痛いくらい縮み上がった。「な、な、なにするんですか!?!」
慌てふためく私に、和馬さんがニコツと笑いかけてくる。

「私たちが深く結ばれていることを、中村君に見せつけてあげようと思ひまして」
「……アンタ、ここが職場だってこと分かってんの?」

留美先輩が低い声を出すけれど、彼はまったく動じない。

「分かっていますよ、ですから頬に留めたんです。本来ならユウカの愛らしい唇を私の唇で塞ぎたいところを、グツと堪えたのですよ」

「ほ・ん・ら・い・な・ら、頬のキスもダメでしょうが!」
「そうですか? 頬へのキスはあいさつですよ」

「生粋の日本人のくせして、欧米人みたいなこと言うな!」
「愛さえあれば、そんなこと関係ありません」

二人は私を抜きにして、言い合いを始めてしまった。
突然キスされたことと椅子から落ちかけたことで、心臓がバクバクしている。まったく、和馬さんはつくづく私を驚かせる天才だ。

「だけど、私にも彼を驚かせる策がある。喜ばせつつ驚かせるという、とっておきの秘策が。」

——今に見てろよ——!

和馬さんと留美先輩が言い合いを続ける中、私は決意を新たにしていたのだった。

第一章 深まる想い

1 私&社長vs和馬さん

五月の大型連休は終わってしまったので、世の社会人は、週末のお休みを心待ちにしているものだ。

もちろん、私も土日のお休みを楽しみにしている一人である。そんな私以上に、今か今かと週末を待ち望んでいる人がいた。私の恋人、和馬さんだ。

彼は社長付きの秘書ということで、私たち一般社員とは違って、急きよ休みが返上となることもある。社長が参加する緊急会議が土日に行われることになれば、もちろん彼も出社しなくてはならない。

ついこの前まで行われていた会社の将来を左右するほどの大事な商談も、休日は関係ない様子で、期間中は二人で過ごす時間が激減した。

そういったこともあったせいかな、和馬さんは今、とにかく私と一緒にいる時間を作ろうとする。週末はもちろん、平日でもそうだ。

まあ、それって嬉しいことだよ。私だって、大好きな和馬さんと少しでも一緒にいたいと思っているから。

だけどもね、だーけーどーねー！

「か、か、か、和馬さん！ なんでここにいるんですか!？」

経理部から帰ってきた私は、総務部に入るなり叫んだ。それというのも、私の隣の席に、長身の男性が我が物顔で座っていたからである。その男性とは、言わずもがな和馬さん。

その席の本来の主は、私より三つ年上である女性だ。彼女は今日、体調不良で欠勤しているのだからと、空席になっていた。だからといって、この部署とは関係のない和馬さんが堂々と座っているものではない。

いや、それがお昼休みであれば、別に構わないのだ。

ウチの会社は、『ゴミさえきちんと片付ければ、どこでお昼ご飯を食べてもいい』ということになっているので、まったく違う部署の社員さんが総務部の知人を訪ねてきて、そこで一緒にお昼を食べるといった光景は珍しくない。

しかし、今は十四時を少し過ぎたところ。勤務時間の真っ最中である。

ツカツカツカと小走りで駆け寄り、自分の隣の席に優雅に腰掛けている人物をジッと見つめる。それから手の甲でゴシゴシと目元を擦った。

しかし、現代の光源氏様と呼ばれている和風美青年は消えることがない。もう一度目を擦ったが、私の前には艶やかな黒髪を持つ男性が座っている。やっぱり、幻じゃない。「ど、どう、して……」

驚く私に、和馬さんはいつもと同じように穏やかに微笑んできた。

「おかえりなさい、ユウカ先輩」

「え？」

——今、聞き捨てならない言葉を聞いたような……

かつて彼は、私が新入社員の可愛さを力説する様子を見て、『私もユウカの後輩になりたいです。そうすれば、仕事でもユウカと一緒にいられますから』と言いつ出し、総務に異動しようと考えていた。年齢や立場上、私が和馬さんの先輩になるわけがないのだが、彼の理屈だと、後から配属された人は誰でも後輩になるのだという。

すでに冗談で終わった話だと思っていたのだが。

——まさか……、まさか、そんな。

ここで私はあることを思い出した。異動届が受理されるのは、最短で一ヶ月後だったはず。もしもあの時、彼が異動届を提出していたら、総務部の席に座っていてもおかしくない時期だ。

——いやいやいや、そんなこと、朝礼で言っただけだったし。それに、和馬さんみたい

な優秀な秘書を、社長が手放す訳ないし。

そうだ、そんな馬鹿みたいなこと、実際に起こるわけがないのだ。これはきっと、和馬さんが私を驚かせようとしているだけだ。

ところが……

「竹若さんの歓迎会は、今週の金曜日でもいいですよね？」

「お店はどこにしましょうか」

周りにいた社員さんたちの会話が、私の耳に飛び込んできた。

——な、なに、和馬さんの歓迎会とな!?

ならば、正真正銘、彼は総務部の社員となったのだろうか。

「あ、あの……」

しどろもどろになっている私に、和馬さんがクスツと笑う。

「ユウカ先輩、どうしました？」

「えっと、ほ、本当に、和馬さんが、私の、こ、後輩に？」

つかえつつつかえ尋ねると、彼の切れ長の目がユルリと細くなった。

その瞬間、「じゃああん。タンポポちゃん、これ、見て！」と、いきなり現れた留美先輩が、B4サイズの紙を突き出してくる。

そこに書かれていたのは、『ドッキリ大成功！』という文字だった。

「えッ!? ド、ドッキリ!」

パチパチと高速で瞬きをしながら、私は周囲を窺う。

「そ、それなら、和馬さんの歓迎会の話は!」

「冗談に決まってるでしょ。信憑性を高めるために、あの二人には協力してもらったのよ」

歓迎会だの、お店だのと話していた二人は、ニコニコ笑いながら私に手を振っている。

「はあっ!? そこまでして、私にドッキリを仕掛ける理由ってなんですか!」

詰め寄った私に、留美先輩がニンマリと口角を上げた。

「理由なんてないわよ。なんとなく、楽しそうだと思ったから」

そんな理由で、こんなドッキリを企むなんて。私は本気で心配したのに。なにしろ和馬さんなら、異動くらいはやりかねないからだ。

「もう、心臓に悪いことをしないでくださいよお!」

私は先輩が持っていた紙を奪い取り、ビリビリと破いてやる。それをグシャグシャに丸め、ゴミ箱に叩き込んだ。

「ごめんね、タンポポちゃん。もう、しないから許して」

謝ってくる先輩のことを、チロリと睨み上げる。当然だ、二度とごめんである。

——和馬さんへのドッキリはもちろんだけど、そのうち、留美先輩にもドッキリを仕

掛けてやるんだから!

ちなみに彼用のサプライズ計画は少しずつ形になっていて、必要なアイテムはバツチリ手に入れた。こっそりリハーサルも繰り返している。あとは、いつ仕掛けるかというタイミングを決めるだけだ。

——さてと、留美先輩はどうやって驚かせよう。

ジト目で睨んでいると、先輩がポンッと私の頭を撫でた。

「そうそう。竹若君は用事があって、タンポポちゃんを待っていたの」

「だったら、ドッキリなんかやっている場合じゃないですよね!」

いくら今日の総務部は仕事が忙しくないからといって、そんなことをしてもいいはずもない。まったく、周りの人たちもノリがよすぎる。

「ほらほら、そんなに怒ったら可愛い顔が台無しよ」

先輩の言葉に、和馬さんが静かに席を立った。

「いえ、ユウカは怒った顔も可愛いので、なんの問題ありません」

そう言って、和馬さんは私の背後に立って抱き締めてくる。

「あら、まあ。ごちそうさま」

口元に手を当てて「おほほっ」と笑った留美先輩は、そそくさと席に戻ってしまった。

「もう! 留美先輩!」

なんだって先輩は、すぐに私をからかってくるのだろうか。

なにはともあれ、和馬さんが総務部に異動じゃなくてよかった。あとは、私に回されているこの腕をどうにかするだけだ。

逞しい腕を、私はとりあえず、ペチペチと平手で叩いてみる。しかし、ちっとも動かない。次に手首を掴んでグイグイと引つ張つてみたが、それでもやっぱり和馬さんの腕は緩まなかった。

「和馬さん、放してください。私に用事があるんですよね!」

「確かに用事があつて総務部に出向きましたが、多少の時間ならいいではありませんか」
 楽しそうな口調で告げた彼は、必死に逃れようとする私に構うことなく、その拘束を強めてきた。

「ムキになっているウウカも、これまた可愛くていいですね」

「よくありません! 今は勤務時間ですよ!」

私は最終手段として、肘鉄を彼のお腹にお見舞いしてやろうと考える。本当は大好きな和馬さんに手荒なことはしたくないけれど、このまま晒し者でいるのは嫌だ。

鍛え抜かれた彼の腹筋に私ごときの肘鉄は効果がないかもしれないが、それでもこのままでいるわけにはいかない。

ちよつとだけ罪悪感を抱きつつ、私はうしろに向かつて勢いよく肘を打ち付けた。

——えい、やつ!

ボスンと、私の肘が見事に和馬さんのお腹に埋まった……かどうかは不明だが、彼の腕は私の体からスルリと離れていった。

社長の警護も務める和馬さんに効果があるなんて、もしかして私の肘鉄は、結構な威力があるのかも。秘めたる私の力が、今、ここで目覚めたのかもしれない。

これで和馬さんに対抗できる手段を得られたとホクホクしていたら、どうやら事情は違つていたようだ。

「もう少しウウカの抱き心地を堪能したかったですね、残念ながら時間切れですね」
 和馬さんの腕の中から私が完全に抜け出た時、席を外していた総務部の部長が戻ってきた。いくら大胆不敵な和馬さんでも、部長の前では奔放に振る舞いはしないようだ。

彼が私を手放したのは肘鉄が決まったからではなく、部長が戻ってきたからなのか。せつかく対抗手段を手に入れたと思つたのに、ものすごく残念である。

やれやれとため息を吐いた私は、和馬さんに向き直つた。

「それで、私に用事ってなんですか?」

見上げた先にあつたのは、蕩けるように甘い笑顔ではなく、静かに微笑む仕事用の和馬さんの顔だった。

ところ構わず抱き締められるのも困るけれど、社長第一秘書の顔に戻つた和馬さんも、

それはそれで困る。だって、かっこよくて動揺しちゃうだもん。

ドキドキと暴れる心臓をなんとか落ち着かせようと、こっそりと深呼吸を繰り返す。そんな私を見て、彼の切れ長の目がわずかに弧を描いた。

「社内報に載せる社長のインタビューの件で、訂正をお願いしたく伺いました。お話しした情報は少し古いものでしたので、先日改訂された内容に差し替えていただきました、再度インタビューに来てほしいのです」

「分かりました。社長のご都合は？」

「よろしければ、このあと社長室に来ていただけますと助かるのですが」

「では、準備が整い次第、すぐに伺いますね」

「はい、お願いいたします。私は先に戻っておりますので」

そう言って、和馬さんは私に会釈してから総務部を出ていった。

「あれ？ どうせ行き先は同じだから、私と一緒に行けばいいのに」

隙あらば私のそばにいようとする彼にしては、珍しいことだ。もしかして、なにか急ぎの用事を思い出したのだろうか。

「まあ、いいか。さっさと支度して、社長室に行かなくちゃ」

そんな独り言を漏らす私の顔は、ちよつとだけ緩んでいた。

——今のやり取り、なんかよかったよね。

いかにも仕事していますといった感じで、すごく新鮮だった。それに、和馬さんと対等に会話のやり取りができて、社会人としての自分の成長も感じられた。私だって、いつまでもお菓子をもらって喜んでいただけのお子様ではないのである。

筆記用具やボイスレコーダーを準備して、私は総務部を出た。多忙な社長を待たせてはいけないので、足早に廊下を進む。

そして角を曲がった瞬間、そこにいた誰かにボスンとぶつかってしまった。

「きゃっ、すみませ……」

咄嗟に口にした謝罪を言い終える前に、よく知っているシトラス系の香りが私を包む。

「えっ!? 和馬さん!？」

いきなりのことに軽くパニックになっている私を、和馬さんが素早く胸に抱き込んだ。逞しい胸に私の顔がギュウギュウと押し付けられ、まったく身動きが取れない。

「な、なんで? どういうこと!？」

目を白黒させている私の頭上に、クスクスと楽しそうな笑い声が降ってきた。

「ここで待っていれば、ユウカが私の腕の中に飛び込んでくださると思ひまして。

読みが当たりましたね」

そんなことを言いながら、彼が私の髪に頬ずりをする。

——なに、それ! 和馬さんが先に一人で総務部を出たのは、そういうことだった

の!?

まんまと罠わなに引つかかってしまったことが悔くやしいし、この状況が恥はずかしくてたまらない。

「か、か、和馬さん！　ここ、社内ですから！」

逃のがれるのは無理だと分かっているけれど、私は荷物を持っていないほうの手で彼の胸を押しした。

ところが、二人の体の間にわずかな隙間すらできない。それどころか、さらに強い力で抱き寄せられてしまった。

「ですが誰の目もありませんし、問題ないです。一般の社員が社長室に近付くことはありませんから、ここを通る者はそうそういないでしょう。どうぞ安心してくださいね」
そう言って、和馬さんは私のつむじにチュッと音を立ててキスする。

「ダ、ダメですって！　放してくださいよ！」

「嫌です」

「私だって、嫌です！」

即答に即答で返したが、状況は一向に変わらない。

「一般社員がここに来なくても、他の秘書さんが来るかもしれないじゃないですか！　ほら、第二秘書さんと第三秘書さんが来たら、どうするんですか！」

「ああ、彼らなら用事を言いつけて外に出しましたので、当分は戻ってきません」
和馬さんがシレッと言った。

——なんだと！

どうにか彼を説得しようと試こころみたものの、空振りに終わってしまった。

しかし、ここで諦あきらめたら和馬さんの思うツボだ。私はジタバタと暴あはれつつ、再度説得を試こころみる。

「あ、そうだ！　社長、中にいるんですよ！」

インタビューをやり直すために、私は来たのだ。つまり、社長が在室している。

「早く行かないと、心配した社長が出てきますよ！　和馬さんだって、上司にこういうところを見られたら、気まずいですよね？　ね!？」

総務部の部長が姿を現した途端とたん、和馬さんは私を抱き締めることをやめた。直属の上司に目撃されたら、相当気まずいだろう。……と、思ったのだが。

和馬さんはフツと短く息を吐く。

「今さらですよ」

——ですよねー！　そうでした、そうでしたっけねー！

私はこれまでに社長の目の前で練り広げられた羞恥しゅうちプレイの数々を思い出した。

以前社長インタビューのために訪れ、俯瞰ふかんで社長の写真を撮りたいと申し出た時、ち

びっこの私を和馬さんが抱き上げたことがあった。それに、暴漢ぼうかんにどう立ち向かうのかと和馬さんに質問した際、動きを封じるといふ名目で堂々と私を抱き締めてきたこともあった。

どちらの時も、社長はすぐ目の前にいたのだ。

他の上司のことは気にするのに、どうして社長の目は気にしないのだろうか。一番、気にしなくてはならない相手だというのが。

それだけ和馬さんは社長に気を許しているのかもしれないが、社長秘書として、そして社会人として、それはいかなるものかと思う。

顔を真っ赤にして、「あのっ、でもっ」と繰り返していると、ふいに彼の腕から力が抜けた。私が抜け出すのに十分なほど、拘束こうそくが緩む。

彼にしては珍しいことだけど、油断は禁物である。私はすかさず和馬さんと距離を取り、彼の手が届かない場所に立つ。

和馬さんはそれ以上距離を詰めることもなく、静かに微笑んでいるだけだ。

「さあ、インタビューを済ませてしまいましょか」

これまでの言動とは一転して爽さわやかな笑みを浮かべている彼の様子に、私は軽く首を傾げる。いや、仕事を思い出してくれてよかったけれど、和馬さんが大人しく引き下がるだろうか。

——という予想は、見事に当たる。

「ここで時間を取ってしまうと相変わらず片想いを続けている寂しい社長が私をやっかむかもしれませんしね。それならばユウカも私も仕事を終わらせ、その後で心おきなくじっくりと恋人同士の時間を過すごしたほうがいいですから」

和馬さんはやたらに『じっくりと恋人同士』の部分を強調し、しかも、艶つやめいた光を瞳に浮かべてきた。だから、私の顔がさらに熱を持った。

「そ、そういうこと、会社では言わないでください……」

まだまだ恥はずかしがり屋の看板が下ろせない私の顔から、ついに火が噴き出す。持っていたファイルで顔を隠すと、和馬さんがクスツと笑った。

「恥はずかしがっているユウカは、私の理性を崩壊させるほど可愛いですね。やはり、少しばかり仕事を忘れることにしましょうか」

そして腕を伸ばし、指先で私の左の耳をくすぐってくる。

「ひゃんっ！」

敏感な部分を急に触られ、変な声を出してしまった。それがまた恥はずかしさに拍車はくしゃをかけ、頭あたまの先からつま先まで、一気に体温が上がった気がする。

「か、和馬さん、やめてくださいっ」

後ずさりしたけれど、無情にも私の背中に壁が当たってしまった。

これ以上は下がれないというのに、和馬さんは大きく一步前に出る。

「本当に可愛らしい……」

少し掠れた声は昼間の会社で聞くのは憚られるほど色っぽい。そうこうしてる間に、彼の目が穏やかな社長秘書のものから獲物を前にした肉食獣のものに変わり始める。

——う、嘘、和馬さん、本気!?

全身が心臓になったように小刻みに震えていると、和馬さんの背後にある立派な扉がものすごい勢いで開いた。

「竹若の野郎、どこをほつつき歩いてやがるんだっ！ 小向日葵君を呼びに行くだけで、どれだけ時間をかけてんだよっ！」

お綺麗な顔には似つかわしくない口調で叫びながら、社長が飛び出してくる。

あまりの荒々しさに、私は目が点になった。

「じゃ……、社長？」

私の眩きに、和馬さんの舌打ちが重なる。

「これからがいいところでしたのに……」

そんな和馬さんのセリフを耳にした社長が、ズカズカと大股でこちらにやってくる。

「いいところだと？ ふざけんな！ ここは会社だ！ いくらお前が小向日葵君を溺愛していたとしても、時と場所をわきまえろ！」

そんな社長に向き直り、和馬さんが軽く口角を上げた。

「溺愛しているからこそ、時と場所を考える余裕もなく、ほしくなってしまうのですよ。

ああ、寂しい片想い続行中の社長には、私の気持ちが理解できないのですね。これは失礼いたしました」

「たーけーわーかー！」

火花を散らす長身の二人の間にちびっこの私が立っても仲裁できるはずもなく、ただただ、オロオロと見上げるしかできない。

どうしたらいいのかわからなくて手を伸ばしたりひっこめたりしていると、廊下の先から二人分の足音が聞こえてきた。

「おっ、社長と竹若先輩だ」

「廊下でなにをしているんですか？」

第二秘書さんと第三秘書さんが戻ってきたようだ。これでようやく場が収まる。私はホッと胸を撫で下ろした。

現れた二人の秘書さんに、社長が腹立たしげに歩み寄る。

「聞いてくれ！ またしても竹若が、俺に対して失礼なことを言いやがったんだ！ しかも、仕事をほったらかして、小向日葵君とイチヤイチャしているんだぞ！」

——社長、違います！ 私は別に、イチヤイチャなんてしていません！ 和馬さんが

一方的に絡んできているだけなんです！

と言いたい、社長の剣幕がすさまじいので割って入れない。

仕方なく事のなりゆきを見守っていると、第二秘書さんと第三秘書さんが苦笑した。

「社長、その件については、諦めたほうがいいですって。竹若先輩の言動が、今さら改まると思いません？」

「それに、先輩が小向日葵さんに異常なほど執着していることも今さらですよ」

なんだか聞き捨てならないことを耳にしたが、そびえ立つ長身四人の間に入っても彼らの視界に映ることができず相手にしてもらえないだろう。

それにしても、社長がかわいそうになってきた。ここにいる人たちの中で一番偉いはずなのに、なぜか秘書さんたちも社長ではなく、和馬さんの肩を持っている。

ここはせめて、私だけでも社長の味方になろう。いつも美味しいお菓子をもらっているしね。

私は勇気を振り絞って、四人の間にひよいと割り込んで存在をアピールした。

「社長、インタビュアの録り直しに参りました。社長なくして、我が社の社内報は成り立ちませんからね」

ニコツと笑いかけると、社長の顔がパアツと明るくなる。ところが次の瞬間、その表情が引きつった。

そして、心なしか周りの気温が下がった気がする。

——あれ？ どこか、窓が開いてる？

キョロキョロと辺りを窺う私の目に、顔色が悪くなった第二秘書さんと第三秘書さんが映った。さっきまでなんでもなさそうだったのに、急にどうしたのだろうか。

不思議に思いながら、今度は和馬さんに視線を向けた。

「……ひっ」

——ま、魔王がいる！

和馬さんは絶対零度の空気をまき散らし、据わった目のまま笑みを浮かべている。

「ユウカに味方してもらおう社長は、目障りではありませんね。社長、インタビュアを受けるのではなく、今から遺書を書いてみませんか？」

「おい、竹若！ 嫉妬心で俺を亡き者にするな！」

社長の悲痛な叫び声が、広い廊下にこだました。

その後、私たち五人は社長室へと場所を移し、ようやく本来の目的であったインタビュアの録り直しを始めた。……のだが、なんだか配置がおかしい。

第二秘書さんと第三秘書さんが、自分のデスクで黙々と仕事をしているのは分かる。

ソファセットに社長と私が向き合って座っているのも分かる。

ただ、私の左隣にびったりと太腿ふとももをくつつけて和馬さんが座っているのは、絶対におかしいと思う。

しかも和馬さんは私の左腕に自分の右腕を絡めている。これは、デート中の恋人同士が腕を組んでいる体勢だ。今の組み方は男女逆パターンだが、この絡めっぷりは恋人同士のとそれとしか言いようがなかった。

「和馬さん、放してください。これじゃ、メモを取りにくいです」

膝の上に載せたメモ帳を押さえることができないので字がブレてしまい、紙面にはミズがのたうち回っている。

私は自分の左腕を揺すってみせる。しかし彼はニコニコと笑っているだけで、その腕を解ほどこうとはしなかった。

「ボイスレコーダーを動作させているのですから、わざわざメモを取らなくてもいいではありませんか。こちらに録音した会話を後で文章に起こせば、問題ありませんよね」向かい合わせになっているソファの間には品のいいローテーブルが置かれていて、そこにボイスレコーダーが載っていた。

和馬さんは空いている左手でボイスレコーダーを示し、さらになっこりと笑って見せる。

しかし今は勤務中で、こんな風に腕を組むべきではない。

「で、でも、気になった言葉は、メモを残しておきたいですし」

私はもう一度左腕を揺すったのだが、結果はなんにも変わらない。それどころか、面倒な事態に発展してしまった。

「ユウカ、ひどいです。私という恋人がいながら、社長なんかを気にするなど。私はいいだって、ユウカのことだけを想っているというのに」

形のいい眉がわずかに下がり、和馬さんは悲しそうな表情を浮かべた。
とはいえ、ひるむわけにはいかない。

「そんな顔をして、ほだされませんよ。和馬さんも自分の仕事に戻ってください」向かいの席に座る社長が、私の言葉に大きく頷いた。

「どうぞ。それに、竹若。上司に対して、『なんか』とか言うな」

ところが、和馬さんは私の言葉にも、社長の言葉にも耳を貸さない。

「ユウカはいかなる時も、私だけを気にかけてくださればいいのですよ。社長なんか、気に留める必要はありません」

「……また、『なんか』って言いやがったな」

社長が思いつきり渋い顔をしているにも拘かわらず、和馬さんは絡めている腕にいつそう力を込めてグイッと身を寄せてきた。そして、私の耳元で甘くささやく。

「ユウカ、こちらを向きなさい。その愛らしい瞳に、私だけを映してください」

——ちよ、ちよっと、この人、上司の前で、なに言ってるの!?

愛情溢れるセリフは嬉しいが、仕事中にこんなことを言ってはダメだ。

私はドキドキしながらも、少し厳しい表情を浮かべた。

これまでさんざん和馬さんには恥ずかしい思いをさせられてきたので、私の心臓にも耐性が付いたのである。

和馬さんさえ時と場所をわかまえてくれたら、こんな耐性など必要ないのに……。おつと、そういうことを言っている場合ではなかった。

私はさらに、むむっと眉根を寄せる。

「お願いですから、邪魔しないでください!」

我ながら毅然として言えたと内心で喜んだのだが、この程度で引き下がる和馬さんではない。

「先程、社長が激昂したから、気を使ってそのように言うのですか? 社長の態度はまだに片想いをしている僻みからきているように思えてなりません。社長たるもの、もつと大らかでいてくださいさらないと、我々社員は委縮してしまいますよね」

そのセリフを聞いた私の顔が軽く引きつる。社長の顔は、盛大に引きつっていた。

——ええと……。委縮するつて。誰が?」

僻みとかではなく、非常識な和馬さんに対してきつく注意しているだけなのだ。それ

を言うなら、和馬さんこそ、部下として立場をわかまえたほうがいいと思う。

さて、この状況をどうするか。第二秘書さん第三秘書さんは、見たところ和馬さんに逆らえないようなので、援護は期待できない。

一番頼りにしたい社長でさえ彼にやりこめられているので、ここは私が頑張るしかないだろう。

私は大きく息を吐くと、社長に視線を向けた。

「少し、お時間をいただけますか?」

「ああ、構わない。この状況を打開できるのは、小向日葵君だけだからな」

社長に苦笑いを向けた後、私は自分の左腕をグイッと引いた。そうすると和馬さんの上半身が傾き、彼の右耳が私の口元にやってくる。

私は恥ずかしさで頬が熱くなるのを感じながら、彼にささやきかけた。

「……今日は水曜日ですけど、今夜、和馬さんのところに泊まります」

基本的には、金曜日の夜か土曜日にしか泊まらない。和馬さんの部屋で一晩過ごすということは、単に二人で食事をして、大人しくベッドで寝るだけではないからだ。

和馬さんに抱かれた翌日は、ほとんど足腰が立たない。まあ、次の日も休みなため、彼が二回戦、三回戦を挑んでくるというのも理由なのだが。

たとえ一回戦で終わったとしても、やはり体力などの差により、翌日の私は動きが鈍

くなってしまうのだ。

「ただけ今は、こうでも言わないと、和馬さんが絶対に引かないだろう。」

それにしても、よくぞ、ここまで言えるようになったな、私！ 半年前の自分からは、絶対に考えられないほどの成長だ。

ドキドキしながらゆっくり耳元から口を離すと、瞠目ぼうもくしている和馬さんと視線が合った。

「……ユウカ？」

私はなおも精いっぱい平静を装よそおいながら、彼にお願ねがいする。

「和馬さんが今、こうして私に付き添ともっていることで残業になってしまったら嫌です。

だから、仕事に戻かえってくれませんか、……ぎゃあっ！」

最後の『か？』を言い終える前に、和馬さんが私に抱き付いた。不意打ちだったので、みっともなく叫んでしまったけれど、そこは勘弁かんべんしてほしい。

「なんと素晴らしいお誘いでしょうか！ あなたのためにも、絶対に残業などしませんよ！」

感極まった様子の和馬さんが、長い腕でギューギューと私を抱き締める。ひとしきり私の頭に頬ずりした後は、スッと立ち上がった。

「それでは、残りの業務を片付けてまいります」

満面の笑みを浮かべた和馬さんは、優雅な足取りで自分のデスクに向かう。そんな彼の背中を見ながら、私のほうに体を乗り出した社長がボソツと呟つぶやく。

「なあ、小向日葵君。いつたい、竹若になにを言ったんだ？」

これまでいっさい聞く耳を持たなかった和馬さんの豹変ひょうへんぶりに、社長が驚くのも無理はない。しかし、種明かしをするのは恥ずかしすぎる。

「あ、あの、そ、それは……、えっと、ひ、秘密です！ それより社長、インタビューの続きをしましょう！」

エヘッと笑って誤魔化ごまかすしかない私だった。

奥の手を使って和馬さんを業務に戻らせ、私は無事にインタビューを録り直すことができた。

私たちは残業することなく定時で上がった。私は、迎えに来た彼と共に地下駐車場へと向かう。それからすつかり常連客となったスーパードで夕食用の食材を買い込み、和馬さんの部屋に帰り着いた。

今夜のメニューは、細切りの長ネギをたっぷり入れた中華風焼きそばと、玉子とトウモロコシの中華風スープ、そして中華クラゲとキュウリの和え物という中華尽くしである。

置かせてもらっているエプロンを身に着け、さっそく調理開始。

まずは、スープだ。鍋にお湯を沸かし、鶏ガラスープの素を投入。そして缶詰のコーンクリームを入れ、ほんの少しの水溶性片栗粉を加えたところで溶き卵を落として終了である。

続いて、和え物作りに移る。キュウリを水洗いしてから両端を切り落とし、塩をたっぷりまぶして、まな板の上でゴロゴロと転がした。このひと手間が大事なのだ。

理由は、えぐみを取り除くためだ。サラダや和え物にしてキュウリを生で食べる場合は、是非とも板ずりしたほうがいい。

他には、緑色が鮮やかになるとも言われている。

些細なことだけど、この手間をかけるかどうかで違いが出るならと、私は毎回板ずりをしている。だって、和馬さんには美味いって思ってもらいたいからね。

まな板の上でたっぷり転がしたキュウリをサッと水で洗い、千切りにした後、買ってきた中華クラゲと一緒にポウルに入れ、醤油とほんの少しの酢を入れて和える。味が馴染んだところで、ごま油を一回し。これで、和え物は完成した。

最後に、焼きそばを作る。ごま油を引いたフライパンに蒸し麺を入れてザッと炒め、鶏ガラスープをお湯で溶いたものを適量投入。さらに炒めてから長ネギを加え、オイスターソースで味を付ける。ものすごくシンプルだが、これがクセになる味なのだ。

今夜も和馬さんの熱い視線を浴びながら、無事に料理を作り終えた。

「相変わらず、ユウカの手料理は美味しそうですね」

頃合いを見て、和馬さんが私に歩み寄ってくる。エプロンを外した私をギョツと抱き締めてきた。料理を終えた私を抱き締めるのは、最近加わった彼の習慣だ。なんでも、料理をしている間は私に近付けないので、その寂しさを埋めるためだとか。

和馬さんの見えるところで料理をしているというのに、寂しいものにもあったものではないと思うのだが、彼に言わせると、『ユウカがすぐ目の前にいるのに、そばにいられないことが寂しいのですよ』とのこと。

片時も離れたくないと思ってくれるのは嬉しいけれど、そう思い続けることで、彼が疲れてしまわないだろうか。

心配になってしまった私は、無意識のうちにため息を零した。

「ユウカ、どうしました?」

頭の上から、優しい声が降ってくる。

「いえ、なんでも……」

『ないです』と続けようとしたところで、思い直した。

「ないわけではなくて……。とりあえず、ご飯を食べちゃいましょう。ちゃんと、後で話しますから」

私がニコツと笑うと、心配そうな表情を浮かべていた彼も表情を緩める。

「ええ、そうしましょうか」

私たちは皿に盛りつけた料理を一緒にテーブルに運び、仲よく食べ始めたのだった。

食べた後は洗い物も終え、いつものように飲み物を持ってリビングのソファへと移動した。

和馬さんと横並びで座った私は、カフェオレを一口、一口ゆっくり飲んでいく。和馬さんもブラックコーヒーをゆっくりと飲み、私が話し出すのを待っていた。

私が『ちゃんと、後で話しますから』と言ったので、無理に聞き出そうとしない。私が気分が悪くならないように、ただ静かに寄り添ってくれていた。

——私のことを、信用してくれているんだよね。

私が自分の気持ちを胸の奥に押し込めていた頃は、和馬さんが怖いくらいの迫力で口を割らせようとしてきた。それこそ、私が多少泣いてもお構いなしに。

そういうことをしないのは、私たちの間に信頼関係ができてきているからだと思う。私を信じて口を出さない彼に伝えるために、軽く息を吐いた後に話し始めた。

「下らないことを言ってしまうけど、聞いてくださいよね」

すると和馬さんはコーヒーカップをローテーブルに置き、形のいい目をユルりと細

める。

「ユウカが話してくださいることを、この私が下らないなどと思うはずはありません。どんな些細なことでも、あなたの気持ちを聞かせてもらえるのは嬉しいですよ」

そう言って、和馬さんは私の頭に大きな手をソツと置いた。

そのセリフも視線も仕草も優しいから、私は安心して話し始めた。

「和馬さんがいつだって私のことをすごく好きだと思ってくれているのは、本当に嬉しいです。でも、そんな風にしていたら、いつか疲れちゃうんじゃないかなって。前に愛情は無尽蔵に湧いてくるって言ってくれましたけど、心が疲れちゃったら、愛情は涸れちゃうんじゃないでしょうか？」

大人しくなった私の頭を、和馬さんは大きな手で優しく撫でてきた。

「また、不安を抱えるユウカが出てきましたか？」

私はコクリと頷き返す。

最近ではようやく自分に自信が出てきて、彼を誘うセリフも言えるようになってきたけれど、ふいに『弱い私』が顔を出してしまう。

「今度は、なにが不安ですか？」

和馬さんの口調には呆れた様子もないし、馬鹿にしている様子もない。私の頭を撫でている手と同じように、優しくてあったかい。

すぐに心が揺らく私を面倒に思うことなく、彼はいつでも私の笑顔を守ろうとしてくれている。

そんな彼の気持ちに安心して、私は胸の中にある不安を素直に口にした。

「前に、友達が言ってたんです。あまりにも相手を好きになりすぎると、すぐに気持ちが冷めてしまうって。だから……」

「だから、私にもそのことが当てはまるのではないかと?」

言えなかつたセリフの続きを、和馬さんが静かに口にする。

それに対して、私は少し間を空けた後、小さく頷いた。

「もちろん、私のことを大好きでいてくれるのは嬉しいです。でも、今だけ深く愛されるよりも、ずっとずっと、和馬さんと一緒にいられるほうが嬉しいなって……」

たくさん愛されるかわりに短い間しか一緒にいられないなら、少ししか愛されなくても、長くそばにいたいと思う。和馬さんがいない人生は、私には考えられないから。

彼の反応を窺うと、優しい表情で私を見つめている視線に気付いた。

「あの……、馬鹿みたいなことを言って、呆れていないんですか?」

「いえ、まったく。私の言葉を、もう忘れてしまいましたか?」

「え?」

パチリと一回瞬きしたところ、彼がクスツと笑った。

「どんなユウカでも、私は愛しています。不安に揺れるユウカを支えることもまた、私の喜びなんです。自信いっぱいユウカはとても魅力的ですので、かえって私に不安になるんです」

そういえば、以前にそんなことを言われた。

もう一度瞬きすると、和馬さんは人差し指の先で私の鼻先をチョンと突つつく。

「そういうた不安を話してくれるほうが私としては嬉しいので、呆れることなどありません。無理に強がるあなたを見ているほうが、苦しくてならないのですよ。分かりましたか?」

そう言って、彼はもう一度、私の鼻先を突つついた。

その仕草がくすぐったくて、彼の気持ちもくすぐったくて、つい、ふにやりと笑ってしまう。

そんな私を見て、和馬さんも微笑む。

「そのような不安は無用です。私の心臓が止まるまで、あなたへの愛情が涸渇することはないでしょう」

やけに自信たっぷりに言ってくる様子に、私はまた笑ってしまった。だけど、完全な笑顔にはなれなかつた。

「こんなこと、考えても仕方がないくらいつまらないことですよ。でも、気になっ

ちゃって……」

すると、和馬さんは私の髪を撫でていた手を下に滑らせる。私の肩を抱き寄せ、こめかみにチュッとキスをしてくれた。

「たとえわずかでもあなたの心を曇らせるのであれば、それは下らないことでもつまらないことでもありません」

ゆっくりと耳に流れ込んできた彼の声はとても真剣で、本気でそう考えてくれているのだと伝わってきた。私は手にしていたカップをソファの前のローテーブルに置き、和馬さんにソツと体重をかける。

肩にあった大きな手に力が入り、さらに和馬さんの左腕も私に回されたおかげですっぽりと包み込まれた。

私の心が不安定になると、それをすかさず察してくれて、和馬さんが私を抱き締めてくれる。それだけで、ぐらつき始めた心が徐々に落ち着きを取り戻していった。

しばらくそのままの状態で黙っていた私たち。先に口を開いたのは、和馬さんだった。「目に見えない愛情というものを持続させるのは、かなり難しいところかもしれません」

まるで独り言のように、和馬さんはポツリと呟く。どう言えば私が納得できるのか、考えながら言葉を探してくれているのだろう。

私は遅い胸にコテンと頭を預け、湧き上がる疑問をそのまま言葉にする。

「そうですね。恋人から夫婦になって、その後もずっと一緒にいる人たちって、どうやって維持しているんでしょうか？」

ボンヤリと告げた言葉に、少しだけ間を空けてから和馬さんが答えてくれる。

「皆さん、それぞれに努力をしたり、日頃から心がけたりしているのだと思いますよ。そういったことを人に尋ねた経験はないので、具体的には分かりませんが」

「んー、努力ですか」

和馬さんが言いたいことは、なんとなく理解できる。

相手を好きでいるための努力は、どういったものなのか思いつかない。だけど、相手に好きでいてもらう努力は分からなくもない。私が料理を頑張っていることや、自分の気持ちを素直に言葉にすることも、こういった努力に当たるだろう。

そんなことを考えていたら、和馬さんがクスッと笑った。

「私の場合、努力というのは少々違いますね。私がユウカを愛しいと思うのは、遺伝子に組み込まれた本能なんです。生きるために必要なこと、というわけです」

「生きるために必要？」

どういふことかと首を傾げると、彼がまたクスッと笑った。

「たとえば、ユウカは呼吸をする際に、意識をして息を吸ったり吐いたりしていますか？」

「いいえ」

そんなことを考えていたら、気になって、かえって息ができなくなってしまいそうだ。「つまり、私のユウカに対する愛情は、呼吸と同じなんです。考えなくても、体や心が自然と動いてしまうんですよ。ですから、私が生きている間は、ずっとユウカを好きでいられます。これで、私の愛情が涸渇するということ心配はなくなりましたね」

和馬さんがにつこり笑う。

——なるほど、そこに行きつくのか。

生命活動と同じレベルで私に対する愛情が湧き上がると言われれば、確かに涸渇の心配はないように思える。呼吸が止まったら生きていけないように、和馬さんが生き続けるためには、私を好きでいることが必要、ってこと……？

——な、なんか、ものすごく恥づかしいことを言われた気がする……

嬉しいけれど我慢できないくらい恥づかしくなっていて、私は体を半分捻って和馬さんの胸にボスツと顔を埋めた。そして、彼がまもっているYシャツを掴み、ウーウーと唸る。

「ユウカ、どうしました？ どこか、痛いのですか？」

「し、心臓が……」

「えっ!? それは大変です！」

慌てた声を出した和馬さんに、私はしがみついた。

「……和馬さんの愛情が、私の心臓に突き刺さって痛いです」

それを聞いた和馬さんは、立ち上がろうとして浮かせた腰をゆっくりとソファに戻す。

「そういうことでしたか」

ホッと息を吐いた彼は、強く私を抱き締める。

「心臓を痛めたユウカはかわいそうですが、私としては嬉しいですね」

クスクスと笑いながら、和馬さんはうずくまる私のつむじにキスをしたのだった。

私の羞恥心が収まったところで体勢を元に戻し、他愛のない話に花を咲かせる。

話題が途切れたところで、私は今夜、わざわざ和馬さんの部屋にやってきた目的を思い出した。

私がここに泊まるということ、和馬さんに抱かれるということだ。しかも、自分から言い出したのだから、今さら後にも引けない。

——恥づかしいけど、約束だし。でも、こういうのって、どうやって切り出したらいいの？

とりあえず、和馬さんには先にお風呂に入ってもらおう。その間に、いい案が浮かべばいいけれど。

和馬さんが出てきたらすぐお風呂に入れるように、着替えを用意して待つことにした。この部屋に来るようになってから、私の服などは寝室にあるクローゼットの一つに置か

せてもらっている。

私はパジャマや下着を取りに、寝室へと向かった。部屋の電気を点けて奥にあるクローゼットを開け、ゴソゴソと必要なものを取る。それらを手にしてリビングに戻り、ふたたびソファに腰を下ろす。

それでも、和馬さんを誘う言葉がまったく思い浮かばなかった。

——困ったなあ。

考えるほど、余計にどうしたらいいのかわからなくなる。お風呂から上がった和馬さんに声を掛けられても、まったく思いついていない状態だった。

結局のところ、お風呂を済ませて脱衣所を出る段階になっても、いい案は浮かばない。こうなったら、流れに任せるしかないだろう。

私はいつものパジャマに着替え、リビングに向かった。

パタパタと軽く響くスリッパの音以上に、自分の心臓の音が大きく聞こえる。その音を聞きながら、和馬さんが座るソファへと近付いた。

私が来たことに気付いた彼が、振り返って名前を呼ぶ。

「ユウカ」

「は、はいっ！」

たったそれだけのことでビクッと跳ね上がってしまう。和馬さんはそんな私を見て、

苦笑している。

「本当に、ここに泊まってくださるのですか？」

その言葉には、『泊まったらどうなるのか、当然分かっていますよね?』という意味が含まれていることが、鈍い私でもさすがに察せられた。

どうして、ここでわざわざ言い出したのだろう。首を捻る私の様子に、和馬さんは苦笑を深める。

「先程、関係を続けるには努力が必要だと話しましたが、ずっと私と一緒にいてくださるのなら、決して無理をしないで大丈夫です。無理をすれば、かえって逆効果になります。今からでも、あなたを家に送りますよ」

もしかして、私が泊まると言ったことを後悔していると考えたのだろうか。

それは違う。恥ずかしいのと誘い方が分からないから困っていただけであって、和馬さんに抱かれたくないとか、無理してらるってわけではないのだ。

「べ、べ、別に、平気です……」

首を横に振ると、和馬さんが立ち上がって私の正面に立った。大きな手で、私の頬を包む。

途端に、私の顔はギクリと強張った。

「これほど緊張しているのに?」

和馬さんはそれ以上なにもせず、静かに手を引つ込めた。彼の瞳に浮かぶ優しい光を見れば、私がここに泊まらないと言っても、決して怒ったりはしないと分かる。それでも、自分から言い出したことを取り消してしまうのは、卑怯な気がする。それに……

「ちよ、ちよつと恥ずかしいだけで、無理をしているってわけじゃないんです」
 明日、多少体が怠くても、彼に与えられる愛情によって、私の心がフル充電されるだろうから。

私は速くなる鼓動を感じながら、和馬さんに抱き付いた。誘う言葉が浮かばないから、せめて態度で示そうと思っただの。

Tシャツをまとう逞しい彼の胸に額を押し付け、反応を待つ。すると、つむじに小さなキスが降ってきた。

それから和馬さんはごく自然な仕草で私を横抱きにして、寝室に向かう。

大きなベッドの真ん中に優しく下ろされると、和馬さんが静かに覆いかぶさってきた。そんな彼の様子をドキドキしながら見つめていたら、スッと彼の顔が近づいてきてキスされる。

シーツに縫い留められていた手は、いつの間にか恋人繋ぎになっていた。二人の舌が絡み合うにつれ、私たちも強く手を繋ぐ。

和馬さんは顔をずらして深くキスできる位置を探り当てると、グッと唇を押し当ててきた。同時に舌を大きく動かし、私の舌に巻き付けてくる。

肉厚な舌が擦り合わされた瞬間、なんとも言えないゾクゾクとした感覚が背筋を上がってきた。

「んっ」

その感覚に思わずピクリと肩が跳ね、繋いでいる指先に力が入ってしまった。

するとそんな私を宥めるように、和馬さんは自身の舌先で私の舌の根元をくすぐってきた。チロチロと小刻みに動く舌によって、背筋がさらに甘く震える。気持ちよさを感じ始めているからだ。

「ふ、んん……」

私が鼻にかかった喘ぎ声を漏らすと、和馬さんは絡めた舌を解いて、ゆっくりと顔を後退させた。

閉じていた目を開けたところ、ぼやけるほどの至近距離に彼の顔がある。

間近で見ても整っている顔をボンヤリ眺めていると、和馬さんの口角が緩く上がる。

「とてもいい表情ですね。今のユウカは可愛くて、綺麗で、色っぽいです」
 満足そうにささやかれ、私も口を開く。

「和馬さんも、かっこよくて、綺麗で、色っぽいですよ」

視線だけで微笑みを交わし、また自然とキスが始まった。彼の舌が私の口内を掻き混ぜるたびに、クチュリという音が唇の隙間から漏れてくる。それが私の耳に届いた瞬間、恥づかしいという思いと、もつとという思いが交錯した。この音は羞恥と同じくらい、快感を与えてくるのだ。

私は彼の大きな手をきつく握り締め、拙いながらも舌を動かす。すると、さつきよりも大きな水音がした。

和馬さんも私の手をさらに握り込みながら、私以上に舌を動かしてくる。

寝室に二人の舌が奏でる水音と、私が零す小さな喘ぎ声が響く。

やがて和馬さんが私の唇をペロリと舐め、私たちはキスを解いた。

私が短く息を吐くと、彼の手が私の手を放して胸元へと移動する。パジャマのボタンを上から一つ一つ丁寧に外し、左右に開いた。

今のはブラを着けてなくて、ツルツルのサテン素材でできたピンク色のキャミソールを着ている。裾に白いレースがあしらわれていて、ワンポイントとして胸元に小さな赤いリボンが付いている。

そのリボンに視線を落とした和馬さんが、嬉しそうに笑った。

「まるで、プレゼントをいただいた気分ですね」

このキャミソールは特別おしゃれなデザインでもないし、高級なものでもない。単に

リボンが付いているだけでそんなに嬉しそうな顔をされると、かえって申し訳ない。

照れ笑いを浮かべる私に、和馬さんはさらに言う。

「ですが、どんなものをまもっていいようと、いえ、まもっていいなくても、ユウカは私にとって心弾むプレゼントのような存在ですよ」

艶っぽく微笑まれて、顔が熱くなる。照れ隠しに横を向き、手の甲を自分の口に押し当てた。

「……こんなプレゼントでよかったら、いくらでもあげます」

モゴモゴと口ごもりながら伝えると、「なにを言うんですか」と、切り返される。

「私にとって、ユウカ以上に大切に愛しい人はいないんです。ですから、なによりも嬉しいプレゼントですよ」

真剣だけど甘い声でささやかれ、ますます私の顔が熱くなる。

ここはお礼を言うべきかどうか少しだけ迷っていると、和馬さんの大きな手が私の胸をゆっくりと揉み始めた。

彼はキャミソールに覆われた胸を下から掬い上げ、五本の指を全部使ってヤワヤワと揉みしだく。強弱を付けて、胸の感触を味わうようにじゅじゅと指を動かしていた。

それに加えて和馬さんは鎖骨を舌先で辿ったり、首筋をごく弱い力で食んでいる。明日も仕事だから、キスマークは付けられないようにしてくれているのだらう。